賀川豊彦の「乳と蜜の流るゝ郷」（その2）

1934年（昭和9年）『家の光』1月号・2月号

～杣人（そまびと）万吉と春駒に出会う。春駒の話から、産業組合研究に思いを寄せる～

監修　**堀越芳昭**
山梨学院大学　元教授

前回は、『家の光』で「乳と蜜の流るゝ郷」の連載が始まった当時の時代状況を探った。深刻無比な昭和農業恐慌の下で政府は農山漁村経済更生計画に着手し、その計画の下で産業組合は農業政策遂行の中心的地位が与えられ組織・事業等が強化されていく。

その一方で連載が始まる直前の1933（昭和8）年11月24日に「全日本商権擁護連盟」が設立され、執拗な反産運動が展開されていくことを見た。

教育者であり、賀川豊彦らとともにキリスト新聞の創刊に尽力した武藤富男氏は、「『乳と蜜の流るゝ郷』は、農村問題の解決には立体農業と、協同組合による以外に途のないことを主張し、その実行の具体的な方法手段を教示しようとしたものである」と述べている。

この至言を頼りにして、今後数回にわたり立体農業と協同組合を二本柱にしてどう農村問題を解決しようとしたのかを中心に、賀川の教示しようとしたもの、当時の青年をひきつけた理由などを探っていきたい。

今回は、主人公田中東助が会津磐梯山のふもとから長野県上田市に旅するなかでの出来事、将来の伴侶となる駒子（当時は芸者春駒）との出会い、さらに東助が産業組合を研究したいと思うようになった契機を見ていきたい。

「乳と蜜の流るゝ郷」はなぜ福島県大塩村から始まったのか

「乳と蜜の流るゝ郷」の出足は「ナス畑」というタイトルで始まる。

「カラスが、近くの森で鳴いた。イナゴが、ナス畑の畦から畦へ群れをなしてとんだ。

きょうもまた、東助は、友人の清吉の勧めてくれるままに、時節はずれのナス畑にはいって、ひからびたナスをちぎって回った。

（略）去年も一昨年も繭の値が安かったし、ことしは、日照りで、畑の作物が、全部だめになった。それで十一人の大家族を抱えていた東助の一族は、九月の末から、もう食うものは何もなかった。わずか三反しかない山田には、はげ頭に毛を生やしたようなイネが、穂を出したきりで枯れてしまっていた。」

場所は福島県の耶麻郡大塩村という寒村で、磐梯山の西北の麓にある。昭和農業恐慌の下で繭の価格が大きく低下し、さらに凶作で明日の食にも困窮する家族の姿が描かれている。当時の北海道・東北地方は冷害等により凶作に見舞われたが、磐梯山の麓一帯は噴火の惨状からようやく立ち直りかけていたとき、凶作に見舞われた訳でその影響はより深刻であった。

磐梯山の噴火とは、1888（明治21）年7月15日に発生したもので、特に北麓に岩の塊が流れ下り3つの集落が埋没し、その他の地区も暴風、土石流によって被害を受けた。477名が死亡したとされ、長い間明治以降の近代日本において最も多い犠牲者が出た、といわれた。また多くの農地が火山灰、火山礫の降下の影響を受けた。

生活をどう再建するかに追い込まれたため、磐梯山の麓一帯は産業組合の設置割合が福島県の中で低い方であったし、大塩村には産業組合は設置されていなかった。

「農村問題の解決には立体農業と、協同組合による以外に途のないことを主張し、その実行の具体的な方法手段を教示しようとした」賀川にとって大塩村はこの上ない条件が揃っていた地、であったろう。こうして、大塩村から物語は始まるのである。

炭焼き小屋で杣人万吉に山村更生方法を教えてもらう

しかし、物語が始まってすぐに東助は父と相談の上、長野県上田市に養子に行っている兄の彦吉を頼って徒歩による無銭旅行をすることになった。そこは東助の母の兄の家で、小さい料理屋とさかな屋を営んでいた。母の兄夫婦には、子がなかったので、彦吉は高等小学校を卒業すると、すぐそこにもらわれていったのである。

東助は上田市に向けて出発するが、「**一歩、村から外に踏み出すと、東助の目**

には涙があふれて、この亡びゆく農村を、どうして救えばいいかということで、いっぱいになった。ナスと、ユリ根と、イナゴがある間まだ命は続くだろうが、その三つがなくなれば彼の一族は、どうして生活するだろうかと、それが気になった」と後ろ髪をひかれながらの出発であった。

村を出て尾瀬峠まで４日かかったが、その前夜、南会津で東助は炭焼き小屋に泊まり、杣（そま）の万吉に世話になる。万吉は木の実の話から始めて山村更生についてもかたる。

「**（略）いままでの林業では、材木を切り出すことばかり考えて、木の実を食うことを教えないものだから、山をはげ山にするだけで、洪水は出る、さかなはおらなくなる、気候は変わる、山里は貧乏する、というわけで、わしも、こりゃ、ひとつ政府の政策を変えんといかんと思っていたんじゃ**」（略）「**いや、ほんとに、ばかな話じゃ、クリの林などでも、苗を植えて十年ぐらいたって、炭にして売ると、一反歩から、たった十五円しかあがらんがなあ。その十年めから、実を取ることにすると、毎年三十円にはなるぜ。実を取ることを考えて、炭に焼かんようにせぬと、日本の国は今に亡びるよ**」と続けた。

これらを受け、「**思いがけなく炭焼き小屋に泊って、山の精ともいうべき万吉に、将来、日本の山村の進むべき道を示されたので、東助は、瞳をみはって、この賢い杣人の顔を見つめた**」のであり、この出会いが東助に農山村更生を考える際の基本の一つを与えてくれたのである。

東助と春駒の出会い、そして春駒、出自を語る

東助は、万吉と別れた後、尾瀬峠、沼田、碓氷峠を越え、浅間の煙を右に見ながら上田の町へ着く。

賀川がこの上田市を小説の舞台に選んだのは、『家の光六十年史』に、「長野県の上田が産青連運動の発祥の地で、上田の自転車商の主人が、連合会上田支所の

神戸市の賀川記念館では、『乳と蜜の流るゝ郷』の表紙パネルとともに展示されている

玄関で、産業組合が自転車を取り扱ったことに抗議して自殺した事件などもあって、小説のなかの事件がリアリティーをもっていたことなどから、とりわけ産青連の若い人たちに競って読まれた」とあり、産青連運動の発祥の地であり、反産運動も活発な地であることからそこでの出来事を描けば若者が読んでくれるというはっきりした確信があったから、というのが筆者の推測である。

上田の町に来て、料理屋とさかな屋を経営している兄彦吉の家（藤井亭）に着いた東助を待っていたのは、村々の農会技手と、特定の会社が組織する特定組合の指導員の親睦会が催され、それに三味線を持つ大勢の芸者という「**弦歌に埋もる人々**」であった。

これを見た東助は、「『**農村は、七十億円の借金に困っているというのに、農会の技手は、芸者をあげて散財するのか！　なるほど、これじゃ、日本の農村が疲弊するのは、あたりまえだ』そんなに考えた東助は、農会の技手と特定組合の指導員を、片っ端からなぐりつけてやりたいような気がした**」

そんな東助に、膳を運ぶのに、てんてこまいしていた兄の彦吉から「二階へ膳を運んでくれ」と声がかかる。配膳がすむと、東助は酒の燗をする役に回された。十日ほど歩いた直後だったため疲れが出て、板の間にすわりこんだ。それをみた藤井亭の女将は、「（**略**）**燗したものは、さっさと上に持っていきなさい**」と怒鳴った。そこへ、芸者の春駒がおりてきた。

「**彼女は、東助が、腰を曲げながら、すみのほうに寄っているのを見て尋ねた。『どこかぐあいが悪いんですか』（略）『いや福島県から、十日ほどかかって歩いてきたものですからね。腰が立たないんですよ、あはははは……』**」これが二人の出会いの瞬間である。

その晩一時過ぎ、旅に疲れた東助は、客室の一つにはいって、うたた寝をしていた。そこに三味線のばちを忘れた春駒がそれを取りに来て、出自を語る。

「『（**略**）**わたしもね、越後の百姓の子なんですの。越後は小作争議が激しいでしょう、そら、ずっと前に、新聞に出たでしょう。越後の木崎村の小作争議っていうのが――わたしの村はその近所なんですの、横暴な地主に土地を取り上げられてしまって、一家族が食えなくなったものですからね。わたしはとうとう身売りさせられちゃったんですよ**』（**略**）

その言葉を聞いて、東助はほろりとした。それは貧しい農民の一家族が、同じ運命をたどっていることを知ったからであった」

現在では、娘の身売りなど考えられもしないが、昭和農業恐慌の時代は決して珍しいことでなく、当時の読者の多くが春駒に同情したのではないだろうか。

春駒の越後での話を聞き、産業組合の研究を志す契機となる

さらに、三日後の早朝、向こう三軒両隣の分まで街路を掃き清めた東助がごみ箱に捨てにいこうとしているときに、「**おはようございます、東助さん！**」と春駒が声をかけ、二人は偶然に出会う。東助は春駒に朝早い理由を問い、彼女はそれにこたえる。

「**『越後の、わたしのおとうさんが、長く、病気で寝ていらしって、おかあさんが、もう助からんだろうといって、手紙を送ってこられたものですから、その日から百日のお願をかけているんですよ。長いこと、おとうさんは、腎臓炎で悪くて、ほんとに困ってしまっているんです。わたしが芸者になったのも、おとうさんの薬代を払うためと、小作料のとどこおりが払いたかったためでしたの』**

母の病気を案じていた東助は、春駒が、芸者に似合わず感心なのを見て、彼女の孝行な心がけに、少なからず感動した」

さらに春駒は、「**わたしの故郷には、近くに医者もありませんしね、町から、いいお医者さんに来てもらうと、一回の往診料が、どんなに少なく払っても、三十円はかかるでしょう、とてもやりきりませんの。越後でも、長岡市の近くの村などは、医療組合ができたとかいっていましたが、わたしのほうの村には、そんなものさえありませんしね、ずいぶん不便ですわ**」と続けた。医療組合ということをはじめて聞いた東助は、医療組合のことを春駒に聞く。

春駒は、「**医療組合っていえば、組合員が金を出し合って、お医者様を雇うんでしょう**」さらに「**医療組合でやっている村は、お医者さまも親切で、喜んでいられるんですよ。しかし、わたしの村などは、長野県にあるような信用組合さえもないものですからね。結局、金にゆきづまると、娘を芸者や娼妓（しょうぎ）に売って、借金の穴埋めにするほか、道がないんですの**」と続けた。

これを聞いた東助は、自分のかわいい二人の妹、みや子と花子が、春駒と同じ運命をみようとしているそのときでも、信用組合を知らなかったことを悟り、「彼は産業組合を、もう少し実質的に研究したいという気が起こった」と本文に記されている。

これを機に、東助の産業組合の研究・実践、理想社会を追求する旅が始まるのだ。

「乳と蜜の流るゝ郷」は連載終了後、改造社より単行本化された後、家の光協会から復刻版として出版された（写真）

＜参考文献＞
『家の光』（昭和9年1月号、2月号）
『乳と蜜の流るゝ郷』（1968年）
『家の光六十年史』（1986年）
＊文章の引用部分は復刻版『乳と蜜の流るゝ郷』（2009年）を参考にした。